

お薬のしおり

痛みをやわらげる薬 No.109 (H23.2)

東京医科大学病院 薬剤部

人は「痛み」を感じることで、身体に何らかの異常や異変が生じていることに気がつきます。もしも、「痛い」という感覚がなかったら、危険を察知、回避することができず、けがや火傷を繰り返し、命を落としてしまうかもしれません。つまり、「痛み」には 外的刺激から危険を察知し、身体を守るための防御反応、身体に異常があることを知らせる警告・危険信号という重要な役割があるのです。しかし、その痛みが強いものであったり、必要以上に長く続いたり、原因不明であったりすると、痛みそのものがストレスの原因となり、不眠やうつ病など、他の症状や疾患を引き起こすきっかけになってしまいます。そのため、「痛み」そのものに対する治療が必要となります。痛みをコントロールすることは、痛みの原因となっている病気や怪我の治療を速やかにしたり、患者さん自身のQOL(Quality of Life；生活の質)を向上させたりすることが出来ます。

では痛みの種類にはどのようなものがあるでしょうか。「痛み」は、持続時間やその発生原因などによって分類できます。

◆持続時間による分類

- ・急性疼痛：急激に発生し、短期間に消失する痛み
- ・慢性疼痛：長く続く痛み

◆原因による分類

- ・侵害受容性疼痛：炎症や外傷などの刺激により起こる痛み
- ・神経障害性疼痛：神経が傷つくことにより起こる痛み
- ・心因性疼痛：心理的な要因により起こる痛み

しかし、痛みの分類は非常に難しく、明確に分けられる痛みもあれば、たとえば、侵害受容性と神経障害性疼痛の要素を併せ持った痛みも存在します。また、慢性疼痛では、しばしば侵害受容性、神経障害性、心因性疼痛が混在しています。

次に、痛みをコントロールするために使用されるお薬を紹介していきます。



○非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs)

NSAIDs (エヌセイズ) とは、ステロイド以外の抗炎症、鎮痛、解熱作用を有する薬剤の総称です。一般的には、痛み、発熱の際に使用される「解熱鎮痛薬」とほぼ同じ言葉として用いられ、「痛み止め」としてさまざまな痛みに対して処方されています。副作用としては、胃腸障害や腎臓障害などが知られています。

○オピオイド薬

オピオイド受容体と呼ばれる部位に作用して脊髄と脳への痛みの伝達を遮断して、痛みをおさえる強い鎮痛薬です。コデインやモルヒネが代表的なお薬です。様々な種類があり、飲み薬、貼り薬、坐薬、注射薬があります。また、鎮痛効果の違いにより、強オピオイドと弱オピオイドの2つに分けられます。

◆強オピオイド：中等度～高等度に用いられるオピオイド薬で、医療用麻薬に指定されています。痛みのある人が正しく使えば中毒になることもありませんし、身体に悪い影響を与えることもほとんどありません。

◆弱オピオイド：軽度～中等度の疼痛に使用される薬剤で非麻薬性と麻薬性のものがあります。

オピオイドは強力な鎮痛薬で、吐き気・嘔吐、便秘、眠気といった副作用が知られています。

○鎮痛補助薬

本来は痛みの治療薬として開発された薬剤ではありませんが、痛みの治療に用いられる薬剤です。抗けいれん薬、抗うつ薬、血管拡張薬、筋緊張弛緩薬、抗不整脈薬、交感神経抑制薬などがあり、通常はオピオイド鎮痛薬や非オピオイド鎮痛薬に追加して使用します。

○末梢性神経障害性疼痛治療薬

神経の痛みは、ケガなどによって痛みを伝達する神経が傷ついてしまうことで、ケガが治っても長期にわたって痛みが続いてしまいます。この過剰な痛みの信号を抑えて痛みをやわらげるお薬です。副作用として、めまいや胃腸障害があります。

近年では、痛みの原因となっている疾患の治療と共に、痛みに対する治療も行われるようになりました。痛みは患者さんの言葉から治療が始まります。痛みに対して不安に感じたり、我慢したりする前に医師、看護師、薬剤師に伝えて下さい。治療を適切に行えば痛みを取り除くことが可能になってきています。

